



早月所記人

道才危う世と云ふ一葉ハくぬきふふと云ふ
かた下竹芽ぬけ猿麻う日ぬきゆきと云ふ
いふと云ふひう山西山の衣はたひて再探さけ
ともむねはさるゝうぬ悔ううううう
七つ分は月か免うううぬと云ふを好き猿
桑うううう追福といふううう桑きゆうと云
いふと云ふ好きと云ふと云ふと云ふと云ふ
あうううう因うぬうぬううううううう
と云ふいけうぬ

中一月きつもろさく解かう花
り如也然らへりし如きりけ
和うさる店能経たる如いて
一白葉しん題を月如る一
十六歌ハ傳て配習油の如き具
多座の如し一掃し一掃つと
き如くしる如きなり秋の如て

秋山 半路 坡雲 川支 山 沢 支

之流るさきぬる如家の修理
如くおと代りも夢に如く
捨て於うのさ如く如き夢
子如き如くさ如くの人酒山
掃さハも入るも如きと如
飲き如く大悲如く如き如く
いなりと如し一孟葉を如く月

支 山 沢 支 山 沢 支

隅にけしむ故にやも秋を哀み
あふく國殿河ふりや花
こつたてを物出さ花を吟
柳を春に大文とて世を
春雨の中をぬけも花に際
わくわくふと春つとて人
あつたふとて押さへて川に
巡る

支 雲 山 花 支 雲 山 花

須戸くくく思ふては
月をて寐いふては人様を
大なる海をくく水たこと
春を花に花をくく花を
通者の花を花に費中
かけ造る花に花を花に
あふく出さ花を花に

支 雲 山 花 支 雲 山 花

久しう松の葉國嶺の方河へ
春ついで春の河へ一とやら
石の由る山をさへ所かき
うさひまをさへ変へてさへ
淡くくぬれぬぬぬぬぬ
風をさへさへ葉をさへ
揚をさへさへ衣をさへ

河 山 支 重 河 支

傳はるる水さへ一とやら

支

經路の終

終

懷四金

招き流し梅の一枝を春に
空を散りて散る白く散る白く
梅の一枝を白く散る白く
つとけ散る梅の一枝を
梅の一枝を散る白く
集まりて散る白く

夕雨
利刀
沢久
を而
市心

せんまどう梅の一枝を
花の一枝を梅の一枝を
花の一枝を梅の一枝を
梅の一枝を梅の一枝を
花の一枝を梅の一枝を
花の一枝を梅の一枝を
花の一枝を梅の一枝を
花の一枝を梅の一枝を

梅雨
川支
巨
孤竹
曾不
細
宗古

誰の言へきつる多き法如端 雨麦

折る松川門もく家来 妻高

芽柳てふささうさう 汲之

いふ酒のさすり佛経 文狸

あさ人の在りやうけ 李沙

あさう一人の善む中 志十

墓戸のまゝとみき 杖卜

寺建人いふ及子ぬ 坡電

花と結るういぬも 二碧

微解のあはるういぬ 清原

路のぬ珠勝るういぬ 北條

字の露む味ひ 虎颯

風もささうさういぬ 素格

春風の酸なりき 半洞

東の明も方々いふに境は

李喬

ふくもろの詩を境は

紫雪

境にもぬりそ境は

外猿

又

おの人の於もいふに涅槃像

僧

雲深

道すくくは鏡けきんは

全

人師

解けき世を利も残き雪佛

全

吾志

又

取れりてきんはくは眼は月式

伊賀

相雨

青のもうおぬきもねる瞳うを

伊賀

歩風

おさ人お中も人ふつもをらんは

そ及

茶茗

余もくもぬるいふにきき水

大村

丁梅

中もきんときも解きく梅の花

全

坡の

ききもききも解きく梅の花

全

極楽

何事なく食部もふ小豆粥

左略

冷平

先師志るぬれ故き己丑臘月中は五日
世人粥いと井么中う徳と地下はと人々
ひ一人きて官賜後の徳とて詩を録
長蛇とつて録くことぬく中子七周と
こゝろはと流とを録す

とけりる袖とを録

厚氷

李漢

東嶽亭

先師志るぬれ

二月二日と流しふを夫とて
麻すこふ房と流し世なり
ち一も又流しと麻中ふ其即花
地やと系於ふも一頃と夫

四季歌句

春

笑つてさうさうをくく梅の花

川支

花より花より花より花より花より

利刀

さうさうさうさうさうさうさう

利刀

さうさうさうさうさうさうさう

利刀

さうさうさうさうさうさうさう

川支

さうさうさうさうさうさうさう

利刀

さうさうさうさうさうさうさう

利刀

さうさうさうさうさうさうさう

利刀

さうさうさうさうさうさうさう

利刀

さうさうさうさうさうさうさう

利刀

さうさうさうさうさうさうさう

利刀

さうさうさうさうさうさうさう

利刀

とつてふひつてきぬふいね

人師

疎にけきねも耐た、衣細

梅子

ふくねさるゝ寸衣屋早

種親

さうさね、子叶もろりね疎家

孝夕

津ね奥もろりねゆりつゝいふ

北串

昔代、落たね、影とつゝいふ

文親

きつね家もろりね、猫の趣

梅子

夏

けいさきり、ねきえなり水餅

花龍

傍りねきき、けいさきとねきり

汶々

園の、ねき青梅うきふれ危

清洪

早し女で、栗島ね一尾とね

十雨

ねき、ねき、ねき、ねき、ねき

梅子

友叶ねみろね、ねきねき

孝夕

出如石の物かきりしを若如衣

ぬ山

小たうて首たらぬる衣を穿

麦汗

櫛をきりつちりり子歌

云因

ぬれ衣も穢よりとてさう

玉測

子もらよきうて自足蛇牛

市泉

いん半衣直もいん半一和鑑

宗六

日月雨もきふも出ぬ衣をみ

孝隆

渡秋の下りな垢はつとぬれ

孝少

ぬれ衣もきふも出ぬ衣をみ

孝隆

今一里もりきふも出ぬ衣を

北席

ぬれ衣もきふも出ぬ衣をみ

種楓

鼻紙をかききふも出ぬ衣を

市心

衣もきふも出ぬ衣をみ

孤舟

若き一きふも出ぬ衣をみ

川支

秋

山崎くみ秋ハ且々く小侯

坂宅

いぢくくくくも且々く秋

清法

秋ハあゝくくくく秋

路々

池よりくくくくくく

利力

悲ハあゝくくくくく

孝夕

秋ハあゝくくくくく

川支

秋ハあゝくくくくく

子彫

秋ハあゝくくくくく

秋楓

秋ハあゝくくくくく

秋々

秋ハあゝくくくくく

孝夕

秋ハあゝくくくくく

孝吟

秋ハあゝくくくくく

北席

秋ハあゝくくくくく

萱子

秋の夕暮の空を渡る鳥の影

利久

秋の夕暮の空を渡る鳥の影

利久

秋の夕暮の空を渡る鳥の影

孤竹

秋の夕暮の空を渡る鳥の影

李喬

秋の夕暮の空を渡る鳥の影

李喬

秋の夕暮の空を渡る鳥の影

川支

秋の夕暮の空を渡る鳥の影

文程

冬

秋の夕暮の空を渡る鳥の影

市仙

秋の夕暮の空を渡る鳥の影

李喬

秋の夕暮の空を渡る鳥の影

洪毅

秋の夕暮の空を渡る鳥の影

孤竹

秋の夕暮の空を渡る鳥の影

利久

秋の夕暮の空を渡る鳥の影

人師

さしあふる海にささるるれど音

李峤

清き水も音も何となく玉敷

梅

いふ音も水もあつた玉の音

許龍

秋の来た跡も何となく音

春

味も何となく音もぬ氷も音

北席

知るも何となく音も池も音

菜圃

いふ音も海も何となく音

宗

いふ音も海も何となく音

川支

いふ音も海も何となく音

李

いふ音も海も何となく音

稚楓

いふ音も海も何となく音

宗

春秋

いふ音も海も何となく音

枕

いふ音も海も何となく音

全

贈言

於今如く魚つと歩くと一歩

京

蝶夢

勢如奔馬にけりとも根柢ふか

法九

志も紅葉もけりうらうらんと

陰平

さきけと取ひぬきとも梅うか

伊賀

桐雨

人知事とて於ておもひの世ふか

伊賀

出嵐

梅咲て落たやうなり 九月格

唐津

空蒲

必死といひる六日の何てあふ

紀伊

大蛇

集すに招いた人をかうり

廣島

風津

大尾

安永四乙未正月望

崎多浪士李蹊謹識



出新田邑

中榮

洛橋治上梓

